

---

# 素直じゃないキミ

ウメ子

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

素直じゃないキミ

### 【Nコード】

N3055C

### 【作者名】

ウメ子

### 【あらすじ】

俺の隣の家に住んでる幼なじみは天の邪鬼だ。そんな彼女が好きなんだけど……そんな彼女とのある一日の話。

(前書き)

今回は地元の関西弁で執筆してみました。関西じゃない人にも分かる文にしたので、大丈夫だと思います。

俺の隣の家には幼なじみがおる。

そんな話は、漫画や小説のなかでもよくある話。漫画や小説での幼なじみってのは、可愛くて守ってやりたくなるような奴で恋に落ちるってコトが多い。

俺も幼なじみに恋心を抱いてるんやけど、俺の幼なじみは……。

ものすごい勢いで階段を上がる音が、家に響いている。その大きな足音は、2階にある一部屋を目指していた。

その人物は、部屋の前に着くや否や、勢い良く扉を開けると、ベッドで眠っている少年を踏み付けた。眠っていた少年は痛みと驚きから目を覚ました。

「いったく、何すんねん」

少年を踏み付けた少女は寝ている少年を見下ろしながら言った。

「いつまで寝てんねん。さっさと起きいや」

「……意味分からへん。てか今何時やねん？」

「8時やで。今日は買い物に行きたい気分やから、はよ用意しいや」

「8時で……日曜日くらい寝かせてやあ〜ゆっくり寝たいねん」

「行くで」

また寝ようとする俺に睨みをきかせながら言うコイツが俺の幼なじみ。

黙ってれば可愛いし、守ってやりたくなくなるような奴やからモテそうなのに、口が悪いから皆に恐がられてる（特に俺に対してかなり口が悪いし、俺にだけは暴力もふるう）。

そんな幼なじみをぼんやり見ていると、今度は頭を思いつきり殴られた。

ゴンツという音が鳴り、あまりの痛さに頭を抱えようと、不機嫌そうな声の上から聞こえてきた。

「わざわざ起こしたたのに、もしかしてまだ寝ようとしてんの？  
ウチ、待つのが嫌いやねんけど」

（理不尽や……買い物約束もしてへんし。てかオカンもすぐにコイツ上げるから、こんな時間にも来るねんなあ）

また殴られるのが嫌やったから心の中でそう悪態をつきながら、仕方なく用意をするために起きた。

「今から用意するから下で待ってて。すぐ行くから」

「はよ用意してや」

そう言うと、下へ下りていった。アイツが行った後、大きなため息をつきながら服を着替えて下に下り、洗顔・歯磨きを済ませてか

らアイツの待つリビングへ向かった。

「なあ、飯食つたらアカン？」

「アカン、15分も待つてんで。」

「俺、飯食わな歩かれへん」

悲しそうに言うと、アイツは小さくため息をついて、分かったわと言った。気が変わらないうちに急いで朝食を食べると、アイツのところに行った。

「よしっこれで大丈夫や！どこに行きたいん？」

「ウチ、新しく出来たショッピングモールに行きたいねん」

「あそこか？ちょっと遠いし、今から行ったらちようどええな」

電車で揺られて、目的地に着くと、アイツの行きたいところへ付いて行った。

最初に入ったのはアクセサリー店。そこは男が好む物ばかりを売ってる店で、俺の好みの物はたくさんあるけど、アイツの趣味やないはず。

「お前つてこついうの好きやった？」

俺がそう言うと、俺の顔をじっと見て手を引きながら、出るとだけ言っ出てしもった。

その後も、男物の服とか靴とかを色々みて回って、結局何も買わへんかった。ちょうど昼時やったから、パスタを食べるコトにして店に入った。

パスタを食べながら、今日のアイツの行動を考えてみると、理由が分かった。

（ああ、そういえば今日は俺の誕生日か……何がイイんか分からへんかってんなあ）

さすがに幼なじみを十数年していると、何を考えているか何となく分かる。そんなアイツの気持ちを嬉しく思った俺は、さり気なく言ってみた。

「そういえば俺さ、この前マグカップ割ってしもてんなあ。アレ気に入っててんけど」

「ふう〜ん」

そう一言だけ言ったアイツは、パスタを食べたあと、また俺の手を引いて雑貨屋に行った。それで様々なマグカップが置いてある所へ行くと、アイツはマグカップを見とった。

「俺に買ってくれるん？」

「ちやうよ。ウチのも割れたの思い出したから見てるだけ」

ホンマに素直やないなあ〜って思いながらマグカップを見ると、一つ気に入ったのがあった。買おうかなって思ってたらアイツが手

を引いて帰るって言い出した。

(なんや、ホンマに俺のためやないんかな?)

少し残念に思いながら歩いてると、トイレに行くから待っててって言うってアイツが行ってしもた。

しばらく待っていると帰ってきて、結局何も買わへんと俺の家に帰った。俺の部屋でアイツとテレビを適当につけて観てたら、鞆からきれいにラッピングされた箱を俺に渡してきた。

「これ何?」

「やる」

よう分からへんと思いつながら箱を開けると、俺が雑貨屋で見てたマグカップが入ってた。

「えっ?コレって……」

「勘違いしなや。欲しくて買ったんやけど、やっぱりいらんかったからあげるだけや。そつえばアンタの誕生日やなあ〜しゃあないから、あげるわ。誕生日おめでとう」

そつばを向きながら、そう言うアイツがめっちゃ可愛く見えた。

(ホンマに素直やないなあ〜。まあ、そんなトコも好きなんやけどな。可愛いなあ〜ちよつとニヤけてまいそつや)

「何ニヤついてんの?キモイで」

(……キモイときたか、ホンマに口悪いな。たしかに今の顔はキモイかもなあ)

コイツとの付き合いは長い。俺に対して口が悪くて暴力ふるうのも好きの裏返して知ってるし、コイツが素直に言われへんのもそう。

でも、そんなコイツの口からどうしても“好き”って一言が聞きたい俺は、素直になるコイツを気長に待つときたいんや。

END

(後書き)

友達に幼なじみの設定で書いてって言われたので、考えてみました。最後まで読んでいただいてありがとうございます。感想・評価をいただけたら嬉しいです

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3055c/>

---

素直じゃないキミ

2010年10月9日02時19分発行